



顔の闇



川崎ゆきお

田中は見た夢が気になった。

「夢の話なので、申し訳ないのですが」

「いえいえ、どうぞ」

「若い頃の友達の夢を見ました」

「はい」

「その友達とは、もう用事がないので、会っていません。しかし、青春時代の思い出として、よく思い出します」

「出来るだけ、掻い摘んでお願いします」

「これでも、かなり簡潔に話していますよ。どんな人なのかは省略してますし」

「何か、気になることがあるのでしょ……その夢を見て。それをおっしゃってください」

「よく思い出していると言ったでしょ」

「はい」

「その思い出していることが夢になったような気がするのです」

「過去の思い出は夢になってよく出て来るものです」

「だから、そうではなく、実際に起こったことは三十年も昔のことなのですが、回想することはよくあります……最近も。それが夢になって出て来たような気がしたもので」

「はあ？」

「だから、思い出した経験が、夢になったのだと」

「かなり分かりにくいのですが」

「だから、相談に伺ったのです」

「で、何が問題なのですか」

「本当にあったことを夢で見たのではなく、あとで思い出したことが夢になった」

「でも、それは同じでしょ」

「違うんです」

「それは大した違いはないと思います。で、どんな夢でしたか」

「一緒に飲んでいました。ところが、その友達とは関係のない人が混ざっているのです。だから、そんなシーンは現実にはありません」

「夢ではよくあることですよ。現実の再現じゃありませんからね」

「それと、彼のことを思い出していたとき、最近夢に出て来ないなあと思っていました。よく彼の夢を見たのですよ。それは青春の思い出としてですが、彼はそれを象徴していました。ところが最近見ない。だから、最近見ないなあ思い出していました」

「それで」

「だから、夢に出て来いと、願ったことが夢になったような」

「先ほど、そのお友達の知らない人が混ざっていたと言っていましたね。誰ですか」

「その友達とは十年ほど一緒に仕事をしたり、遊んだりしましたが、そこで終わりました。混ざっていた人は、その後の仕事で知り合った先輩です」

「スライドしたのでしょうかねえ。入れ替わりの象徴でしょう」

「でも、もうその先輩とも疎遠です。別の仕事に移りましたから、合う機会もありません」

「何かよく分かりませんが、夢の中で何らかの整理が行われているのでしょうかねえ」

「そうなんですか」

「はい、それだけです」

「思い出ではなく、思い出を思い出していたことが夢になったことは？」

「だから、夢のお仕事の一つとして整理がありますから、それでいいのです」

「しかし、不思議なことが一つ」

「何でしょう」

「その友達の顔が見えないのです。顔だけ闇がかかったように暗くて、見えなかったのです」

「神秘的なことを言うわけではありませんが、一度連絡を取られてはどうですか。またはそっと見に行くか」

「どういう事でしょうか」

「何かのお知らせかも」

田中は知人を通じ、その友達の消息を聞いたが、生きているようだった。

それて、安心した。

顔が闇のように暗くて、よく見えなかったのは、もうあまり見たくもない顔のためかもしれない。田中はそう判断した。

了